論　文

投技　山嵐に関する研究

――柔道技術書における著述の傾向――

藪崎　聡

A Study of Throwing Technique Yama Arashi:

Tendency of Writing in Judo technical Text Books

YABUSAKI, Satoshi

Abstract

Here are few usable people in YamaArashi, and, in a throw of the scheme way building judo, it may be said that it is the extremely special skill. In addition, the actual situation becomes the unclear “skill of the illusion” for the judoist of coming ages because Shirou Saigou which was a user does not leave a direct sentence about this skill. I pointed out what this skill drew the writer near to the proud skill of authors in a judo technical book as a general presentation in a Japanese martial arts society approximately 25 years ago, and was listed and criticized shortage and I Tabiki water-like judgment of the tradition of old judoists.

In addition, the reasoning that the jujutsu of old manners particularly the skill of Daitouryu Aiki Jujitsu might be used for was started whether you threw YamaArashi because it was popular in those days to catch judo in mixed martial arts-like viewpoint while winning the joint of an elbow and the shoulder by the turn that was reverse to a series of throws such as Seoinage and Taiotoshi, the sweeping hip-to-loin throw.

I inspected it about the wish that Jigoro Kanou loaded a mountain storm with mainly on a note of Tsunejiro Tomita which would watch this skill closest in this study. In addition, YamaArashi of the origin that I used of Shirou Saigou proved that a thing told as a manual skill of the scheme way building was near now.

抄　録

講道館柔道の投げ技の中でも、山嵐は使えるものが少なく、極めて特殊な技と言え

る。また使用者であった西郷四郎が、この技について直接的な文章を残していないことから後世の柔道家にとって、実態がはっきりしない幻の技となっている。筆者は約25年前に日本武道学会で一般口頭発表として、この技が柔道技術書において著者達の得意技に近寄せて記載されていることを指摘し伝承の不十分さと旧来の柔道家達の我田引水的な判断を批判した。

また当時は柔道を総合格闘技的な視点でとらえることが流行っていたため山嵐は背負い投げや体落、払い腰などの一連の投げ技とは逆の回転で肘や肩の関節を制しながら投げたのではないか、古流の柔術、特に大東流合気柔術の技が用いられたのではないかという推論が出された。

本研究ではこの技を最も間近に見てきたであろう富田常次郎の手記を中心に、嘉納治五郎が山嵐に込めた願いについて述べた。また、西郷四郎の用いた原点の山嵐は、現在講道館の手技として教えられているものに近いものであることを論証した。

キーワード

柔道（Judo）／山嵐（YamaArashi）

西郷四郎（Shirou Saigou）

序　論

講道館柔道には数多くの投技が存在するが、山嵐と名付けられた技は、その中でもひときわ異彩を放つ特殊な技である。著者は数十年にわたり柔道修行における実践を通じてこの技の実施と研究に取り組んできた。

著者はかつて日本武道学会の大会で、この山嵐の各技術書における記述を中心に口頭発表を行い非常に大きな反響があった。今回、20数年の柔道界の、そして柔道研究分野での動向からある一定の知見を改め、当時の推論に結論を出すことのできる時期に来たと考え、本稿の着手に至った次第である。

草創期の講道館柔道は当然ながら体系自体が誕生して間も無く、多くの技の制定や教程等も含めて全てが試行錯誤からの創造と取捨選択の過渡期にあったと言える。

山嵐は初期に制定された五教の技にも含まれるほどの技であったにもかかわらず、現在は使用できる者も少なく、有名になった「姿三四郎」の小説や映画を通じてその存在を遠く感じ取るに止まっている。

すでに当時を知る先達の先生方の多くが逝去され、我々は文献に残された記述を分析、考察することでしか真相に迫ることができないが、この25年間である一定の知見を得ることができたので本稿の着手に至った次第である。

1. 投技　山嵐

1.1　概要

本研究の主題となる山嵐という投げ技は極めて特殊な技である。講道館初期に制定された五教の技に第五教の一つとして組み込まれていたが後の改定で外され今日に至っている。富田常雄著

小説「姿三四郎」で主人公が使う技として、柔道を知らない人々の間でもその名がよく知られている。また、名称も技の様子の苛烈さや力強さをよく表しており、また講道館柔道の投技の中で「嵐」が用いられているのも山嵐のみであり、そのことも技の特殊性と技の激しさを思わせる。

その一方で実体をつかむことが困難を極めていることも、この技の特徴である。以下に、講道館サイドの記述に残るもっとも古い記録に残る、山嵐の動作を引用する。

> 其の実際の掛け方を云ふと、互いに右に組んだと仮定すれば（筆者注・西郷四郎は左利き）、右手で相手の右襟を深く取り、左手で相手の奥袖を握り、同時にかなり極度の右半身となって、相手を引き出す手段として、先ず自分の体を浮かしたり、沈めたり、又ある時は腕先で、ある時は全身を以て、巧みに押すと見せないで、相手を後方に制するのである。そこで自然に相手が押し出る途端を、即ち嶺から嵐の吹き下ろす如く、全速力を以て充分に被って肩にかけると同時に、払腰と同様に相手の右足首を掬ふ様に払ひ飛ばすのである。であるから、此の技を払腰と背負投のコンビネーションと見ても差しつかえあるまいと思ふ。(1)

文中にある「西郷四郎」とは、講道館柔道草創期における四天王の一人である柔道家であり、結局のところ、この技を十分に使い戦い得たのは西郷一人である。

そのためこの技は一応の形と用法が残っているにもかかわらず幻の技と言われ、使い手といわれる柔道家もその後現れていない。

上述の引用は、姿三四郎の著者である富田常雄の実兄であり、草創期の講道館における嘉納治五郎直門の高弟でもある最初の入門者、富田常次郎が書き記したものである。

これが現時点で、山嵐の動きを我々に伝える最も古い記述ということになる。古さがそのまま信憑性と捉えることは無理があるが、実際に技そのものを眼前で見た、柔道家の証言となるので後世の研究者である我々もまずはこの引用を最大限に評価した上で考察を展開していくのが研究者の妥当な姿勢であろう。

1.2　実施者　柔道家・西郷四郎について

この技を十分に体得し自身の得意技として使いこなすことができたのは現在に至るまで西郷四郎一人であることを考慮に入れると、本研究においても西郷四郎個人にある程度の字数を割いて彼自身がこの技に与えた影響も考慮しながら論を進める必要がある。

西郷四郎の生涯を最も詳細に記した文献は牧野　登著「史伝　西郷四郎」であろう。これによれば西郷は1866年（慶応2年）に会津若松生まれ、講道館には1880年（明治13年）に入門している。嘉納が講道館開設後、わずか3ヶ月目である。富田常次郎に次ぐ二人目の入門者であり、門人中でも最古参の部類に入る人物であったと見てよい。

当時の感覚から見ても極めて小躯の西郷であるが（約153cm/約53kg）、それを存分に活かした強さで連日の稽古や他流派との試合に結果を残している。初期の門人は嘉納が特に多流派から引

（1）「柔道発達の側面観」（『柔道』大正12年・富田常次郎）

き抜いたものが多く、その才能を如何なく発揮し初期の講道館柔道の歴史を鮮烈に彩っている。

しかし当時、講道館四天王と謳われた四名の俊英のうち、その西郷だけが講道館から逐電し（明治23年）、生涯を柔道家として生きることをしなかった。

西郷が講道館から出奔逐電した理由は、一般には近代合理主義、功利主義に拠る嘉納の思想、方向性と会津士魂を土台とする西郷の価値観の相違が決定的な理由とされている。

講道館が公表する西郷四郎の事績は以下の通りである。

会津藩士 志田貞二郎３男として会津若松に生まれ、津川町で育つ。1882（明治15）年上京し講道館に入門。1884（明治17）年会津藩家老 西郷頼母の養子となり保科四郎と改名、さらに1888（明治21）年廃家となった西郷家を復興して西郷四郎となる。

西郷は、嘉納師範留守中の道場を守り、また稽古熱心で特に技術に優れ、彼の山嵐は一閃必投の妙技となっていた。

1890（明治23）年嘉納師範外遊中に講道館を離れ、のち長崎に至り「東洋日の出新聞」に健筆をふるい、柔道・水泳・弓道の振興につとめた。1922（大正11）年12月23日静養先の尾道で病没、享年57。訃報に接した嘉納師範は「その得意の技に於いては、幾万の門下いまだその右に出でたるものなし」として1923（大正12）年１月14日付をもって六段を追贈した。(2)

1.3　投技　山嵐に関する異説　大東流との関わり

約25年前になるが、著者は日本武道学会大会においてこのテーマに関連した口頭発表を行った。(3)

当時は総合格闘技が流行り始めた時期でもあり、柔道の技術全体に関しても、従来の講道館試合審判規定に即した解釈から遠ざかり、危険でも強烈な技の威力が推測できる解釈に注目が集まった。

山嵐の解釈にもこうした切り口が新たに盛り込まれた。肘や肩をやや制しながら、一般的な方向とは逆回転、背中合わせ気味に回り込む体捌きを行い畳に叩きつける形のものこそが山嵐の実際の姿だったのではないかという論調が強まった。

講道館柔道の投げ技を定義する大前提において、嘉納は旧来の古流柔術において当然に存在した関節を制しつつかける技を排除した。教育において安全にこれを教えるという環境を作るために柔術の武術としての側面を最大限に活用しながらも危険性を最小限に体系化する作業の中で、急所への当身や関節を制することで生じる受け身の困難性は除かれるべき要素となったであろう。

格闘技ブームの潮流にあっては危険な技の方が人気を呼ぶ材料となるので現代スポーツ競技として成立していた武道にもたびたびスポットが当てられ競技ルールが確立される以前の時代の技から殺傷性の高いものに注目が集まった。現在では「韓国背負い」という名称でインターネットで取り上げられることの多い技法であるが、大衆化を期する嘉納が危険度の高く受身の取りにくいこの技を講道館において採用したと考えるには無理がある。

（2）　講道館の殿堂　西郷四郎　講道館ホームページ
（3）　日本武道学会第25回大会　投げ技　山嵐に関する研究（拙著）

また、当時の西郷による写真画像や動画も一切残っていないので、実は体捌きの方向が一般の掛け方と逆回転、すなわち韓国背負い型の体捌きで行われたのではないか（大東流にも合気道にもこの方向で体を回し肘と肩の関節を動かしにくい角度に制し、投げる技が基本技法として存在する）、だから右利きの西郷が左で組んでこの技を愛用していたのではなかったか。当時の人々は西郷の体捌きが早すぎたために体捌きが逆方向であることに気づかなかったのではないか、という仮説も浮上していた。

武道の世界に関する限り、カメラ等の画像がなかったので伝承が正確性に疑問を呈するという見方は正当性を有するとは言えない。日本文化の多くが見取り稽古という形で後進が必死の思いで先達の動きと精神を目と心で追い続けて自身に宿し、次代へ伝承する。

これの根本を疑っては日本文化の根源自体が信憑性を欠くという結論になる。実際、瞬間を捉える目の正確さはカメラに恵まれた現代の我々より往時の研究者、求道者の方がよほど真剣味に溢れ正確に瞬間を脳裏に刻んだと考えるべきであろう。

2. 技術書に見られる「山嵐」

以下に、講道館柔道創始者である嘉納治五郎と、西郷と共に同じ時代を生きた講道館四天王の他の三名が山嵐をどのようにとらえていたかについて、その記述をまとめつつ考察を加えていきたい。

2.1　嘉納治五郎

教育者であった嘉納はかなり多くの著作物を残しているものの、柔道識者にはよく知られているが、実は嘉納自身の手になる柔道技術書は「柔道教本 上巻」（昭和6年）　ただ一冊のみである。多忙な生活の中、下巻の完成を前に客死している。

この柔道教本の中に、山嵐の記述は一切ない。

投げ技の紹介は以下のようになされている（以下、前掲書目次より引用　旧字体はそのままとした）。

第九　亂取諸技・投げ技　その一
　一　膝車
　二　支釣込足
　三　出足拂
　四　送足拂
　五　大外刈
　六　浮腰
　七　拂腰

この上巻には「その二」はまだ記述されておらずこの後に第十一として亂取諸技・固技　その一が記される。

山嵐の技名はここにおいて見ることはできない。この事実だけは明記しておくべきであるが、それであるからといってこのことを理由に嘉納が山嵐を投げ技として重視していなかったと見るのも早計である。

嘉納の柔道理念において、各技の指導は順次段階的に行いたいという意向が働いていたであろうことは想像に難くない。現在の競技スポーツ的色彩の強い柔道ではあまり顧みられないことでもあるが、嘉納の理念の一つとして柔道は「五教の技」の順に従い、第一教から無理なく合理的に上達を期するということ。これも従来の古流柔術の教伝体系に対する嘉納なりの批判が込められていたからである。

山嵐はこの五教の技のうちの第五教にその名をとどめていた。五教の技が制定されたのは明治28年であり、西郷の出奔から5年を経ている。この経緯から考察できることは、基本的な柔道の投げ技を完成に導く重要な技の一つとして、山嵐がその時点ではまだ嘉納の存念の中に置かれていたということである。山嵐は片襟持ちから払い足と上方への崩しと下方への素早く激しい落とし込みを複合させた技であり、その複合具合は使い手の匙加減に任されているということにおいてもひときわ特殊な技である。

日本文化の形としてこうした「ゆとり」と使い勝手を許すことは少数例ながら茶道の「手なりに」という表現の中にも見て取れるが、合理的に技を組み立てた講道館柔道の技術体系の中ではやはり他に例を見いだすことは難しく、このことも他の技と並列して表記した際に特殊な技として統一性を欠く存在となってしまう。

実際、この後の大正9年の改正において、山嵐は五教の技から除外される。その後は長く講道館柔道の投げ技の中に入れられることなく、そのため幻の技と言われるようになった。

現在は講道館柔道投げ技の分類の中で、手技の一つに数えられている。これについては後述する。

2.2　講道館四天王　富田常次郎

富田常次郎は、講道館最初の門人として知られている。小説「姿三四郎」を著した富田常雄の実兄であり、兄からの説話や弟としての目から見た柔道家である兄の生き様や伝聞がかの小説に大きく影響を及ぼし、貢献していることは厳然たる事実である。

富田は学術、人格、識見において嘉納が最も信頼し、長年にわたって側に置くことを好んだと伝られている。柔道の技量では、四天王と呼ばれた他の3名に及ばなかったようであるが学者肌の落ち着いた人物として伝えられている。この人物が技術書を著していれば示唆と客観性に満ちた貴重な文献となったであろうことは疑いを容れないが、残念ながら単著としての技術書は残っていないが、講道館雑誌に多くの記事を遺している。嘉納の書生としてその経歴が始まり、常に最も近い場所から、嘉納の多岐にわたる活動を長年にわたり補佐したためと見るべきであろう。

以下に富田の経歴を、講道館ホームページより抜粋する。

> 静岡県君沢郡に生まれる。1879（明治12）年嘉納師範の父、希芝の知遇を得、上京して嘉納家の書生となる。
>
> 1882（明治15）年、講道館を創立と同時に最初の門弟となり柔道修行に入る。1883（明治16）

年８月には西郷四郎とともに講道館初の初段となった。

1891（明治24）年４月、明治天皇が学習院に行幸された際には、柔道教師として生徒の柔道を天覧に供する光栄に浴した。その後1906（明治39）年に前田光世、佐竹信四郎らとアメリカに渡り、柔道の普及につとめ、帰国後は本館及び溜池に設けた東京体育クラブを活動の拠点として柔道の普及振興に尽くした。

1937（昭和12）年１月13日没、享年72。講道館草創時代から嘉納師範と起居をともにして、柔道の普及発展に尽くした功績は頗る顕著なものがある。(4)

冒頭の山嵐に関する文章は、富田の手になるものである。西郷を、そして西郷の使った山嵐を間近で見て、またその身を以て受けたであろう富田の文章は後の横山の記述と合わせて信憑性が高いものと言える。

以下に、大正12年、雑誌「柔道」6月号において、富田が西郷との思い出を軸にその絶技とも言える山嵐について詳述したものを抜粋する。

（中略）山嵐と云ふ技は決して腕力や體力の技ではない。全く乗るか反るかと言ふ氣合と膽力との技である。力學上から言ふと、相手の重心を出来るだけ最短距離に崩して、然も最大速力を以て掛ける柔道諸技の内でも最も進んだ技と見る可きものである。

其の實際の掛け方を云ふと、互に右に組んだと假定すれば右手で相手の右襟を深く取り、左手で相手の奥袖を握り、同時にかなり極度にまで右半身となつて、相手を引出す手段として先づ自分の體を浮かしたり、沈めたり、又ある時は腕先で、ある時は全身を以つて、巧に押すと見せないで、相手を後方に制するのである。そこで自然に相手が押し出る途端を即ち嶺から嵐の吹き下ろす如く全速力を以て充分に被つて肩にかけると同時に、拂腰と同様、相手の右足首を掬ふ様に拂ひ飛ばすのである。であるから、此の技は拂腰と背負投げのコンビネーシヨンと見ても差しつかへあるまいと思ふ。（この時襟を取る手は拇指を内に入れて握つてもよし、又その反對に外に出して取つてもよい。實際、西郷も兩方を用ひた様に記憶する）

これだけの技ならば、誰にも出来さうであるが實行はなかなか容易ではない。西郷がこの技を得意としたのには、彼の身體上の特徴が二つあつた事にも依る。その一つは彼の身體が矮小であつたから、殊更に腰を下げなくても、押し返す相手を其のまま引込めば、彼の體は丁度理想的の支點となるからである。故に時間を省き、又潰される憂ひがないのである。

もう一つの特徴は、彼の足のゆびが普通の人と違つて、熊手の様に皆んな下を向いて居た。だから拂腰の様に足をのばして相手の足首にかけると、それが豫定の位置をはづれて、上の方に流れると云ふ様な事がない。即ち、相手の踝を目當てとすれば、そこにぴたりと喰ひついてゐるのであつた。その上、彼は前にも言つた様に、大膽に思ひ切つて乾坤一拋的に技をかけるのであるから、殆んど百發百中相手を投げ飛ばしたのである。

（4）　講道館の殿堂　富田常次郎

要するに此の技は、小さい人が、より大きい人に試みる方が有利であると思ふ。

古い諺に、千日士養ふは一日の用に立てんが爲であると云ふが、果してさうであるならば、講道館の創業時代に於て、未だ世間が我が新柔道の實力を認めなかつた時にあつて、彼れ西郷は實によくその使命を果した一人であると思ふ。(5)

この記述には画像は伴わないが、嘉納の手になる山嵐関連の文献が発見されていない現状において最も重要な手がかりの一つと言えよう。

2.3　講道館四天王　横山作次郎

講道館が表記する横山の事績は以下のとおりである。

東京鷺宮村に生まれる。湯島天神下の井上敬太郎に天神真楊流を学んだ後、1886（明治19）年講道館に22歳で入門。柔術の素地があり、体力に優れ稽古熱心であったので急速な進歩を示し、入門の翌月初段、半年後には二段、翌年には三段となり、警視庁柔術世話掛となった。1904（明治37）年には山下義韶と並んで講道館初の七段に昇段している。この間、東京高等師範学校柔道教師としても指導者の養成に尽くした。

1912（大正元）年９月23日講道館最初の八段に列せられ、同日病没、49歳。横山八段が講道館初期より卓越せる技能と精神をもって講道館柔道の真価を世に知らせ、多くの後進を育成した功績は頗る顕著なものがある。(6)

鬼横山と渾名された横山はその強さが抜きん出ていたと言われる。大正2年、横山作次郎は柔道教範という著書を刊行している。この中には山嵐が記載されている。往時の山嵐の姿を文献から考察する本研究において、意味の大きい文献と考えてよい。

以下にその記述を抜粋する。

山嵐

此業は右自然體に組み、我が右手で相手の右襟を順に捕り、左手で相手の右中袖を捕つて相手をその右前隅へ再三釣り出しますと、時として相手が調子付いて、其體は其隅へ傾き、その重みは右足に乗り、足先で爪立つ様になる事があります。この時第七十二圖の如く、我が體の右後隅を相手の右前隅に密着させ、我が右足の臑の横側を相手の右臑の横脇に當て、我が右足全體で相手の足を拂ひながら、我が右手は初め幾分釣り上げる心持で、後には左手とともに輪を成して引き落とすのです。(7)

ここに記述される山嵐の掛け方が前述の富田の手記と並んで今般の講道館で指導されている手

（5）「柔道」大正12年６月号　柔道発達の側面観
（6）講道館の殿堂　横山作次郎
（7）横山作次郎　柔道教範

技の山嵐の解釈に繋がっている。講道館柔道の他の技と比較しても至極無理のない崩し方と掛け方が記されているが、実施する難易度はかなり高いのは前述したとおりである。

2.4　講道館四天王　山下義韶

講道館が表記する山下の事績は以下の通りである。

1865（慶応元）年、相模国足柄郡小田原生まれ。19歳で講道館に入門し、年に1万本を超す猛稽古を積み実力を付けた。嘉納師範からの信頼は厚く、入門から2年で講道館幹事に抜擢され、倍増していた入門者の取立てを一手に取り扱う大役を任されるまでになった。そして横山作次郎・西郷四郎・富田常次郎らと共に世間から「講道館四天王」と並び評される存在となる。

山下は、警視庁柔道世話係・慶応義塾柔道教師を勤める傍ら、1903（明治36）年、海外への柔道普及の志を持ちアメリカへと渡る。アメリカでは、ハーバード大学・海軍兵学校、セオドア・ルーズベルト大統領らに柔道を指導した。ルーズベルトは山下が教えた2年間、毎日食前に2時間の稽古を欠かさず、ホワイトハウスの中に柔道場を作らせるほど柔道に夢中になったという。

1907（明治40）年帰国し、その後も講道館指南役・高等師範学校・宮内省警察部・早稲田大学・国士舘大学などの柔道教師をも歴任し、後進の指導に当り、1935（昭和10）年71歳で死去した。

嘉納師範は、講道館柔道の普及に尽くした山下を特に講道館葬をもって送り、史上初の講道館柔道十段位を追贈した。以下は、葬儀の際に嘉納師範が読み上げた山下への「永訣の辞」である。

> 君は予の門下にあること五十余年、其の間終始一貫講道館の事業を助け、以て柔道の発展に貢献したり。（略）君の如き予が特に信頼せる講道館最高段の門下を失ひたるは、予の最も遺憾とする所なり。茲に於て予は君に贈るに左の雄頌を以てせんとす。[8]

山下の目を通した山嵐がどのように表記されたかを検証することは極めて意義深い。山下は工藤一三と共著で「新撰　日本柔道経典　上巻　下巻」を昭和6年に刊行している。しかし、昭和に入って刊行されたこの書物には山嵐は記載されていない。

上巻に取り上げられた投技を以下に索引より引用する。

第二章　投技解説（上巻）
　膝車
　支釣込足
　出足拂
　浮腰
　大外刈その一
　大内刈その一
　背負投その一
　釣込腰その一

（8）　講道館の殿堂　山下義韶

（同下巻）
大外刈その二
大内刈その二
小外刈り
釣込腰その二
拂腰その二（著者注　一の誤表記と思われる）
拂釣込足
背負投その二
小内刈その一
（同下巻）
背負投その三
跳ね腰その二
體落その一
拂腰その二
小内刈りその二
内股その一

この技術のラインナップは現在の学校体育における指導の順序に類似性が見られる。強いて言えば大腰がここでは現れていないが釣込腰を以て、腰の上で相手を回転させる系統の技の学習としていたことは想像に難くない。

すでに山嵐は講道館の技術体系からは切り離された存在となっており基本を学習させる教本に記載する大義名分は失われている。そのためこうした時期において刊行された柔道関係の技術書で山嵐に触れているものは極めて少ない。

ちなみに後年、工藤が単独で刊行した「新編　柔道教科書」には、工藤自身の得意技に合わせた払い腰の要素が強い山嵐が記載されている。

2.5　文献からの考察

西郷本人の述べる山嵐の実際や嘉納の文章が残らないことから、山嵐の姿については何通りもの解釈が生まれている。極端なところをあげれば古流に「山落」という技が存在し、これは体を回転させずに大外落風にかけており、これを山嵐の姿と解釈した技術書も存在するのである。

しかし、著者はこうした古流柔術側の記載や格闘技ブーム時の説より、西郷の山嵐を実体験したであろう富田の説を採用し、今現在確認できる資料の中からは最も正確に西郷四郎の山嵐を表現したものと結論を得た。この文中にはっきりと「払い腰のように」と記されている以上、西郷が最も多い頻度で使用した形の山嵐がこれであると判断することは早計ではあるまい。又、西郷の得意技としては、山嵐以外に大外落、大外刈りも伝えられている。この事からも関節制御や回転の方向に特殊な要因があったと考えるのは不自然と言える。

3. 技名からの考察

これは完全な分類の条件にはなっていないが、柔道の技の名称から、その技の根幹を成す動きや要点を考察することはある程度可能であるため、試論として山嵐の名称を研究する。

3.1　山という表記について

古流には山の文字を使用する技名は数多いが、講道館柔道においては山を使用する投げ技は山嵐以外には存在しない。この点は、本研究を進める上で極めて特異かつ重要な点と見てよい。谷落という技が存在するため、古流柔術サイドからはこの谷落と対をなす位置にある山落（片襟を持ってかける大外落に似た形である）に払い足を加えて激しさをつけたものが山嵐であるという説が取られている。

この形も、もちろん柔術の投げ技として十分な説得力と合理性は存在する。また、西郷四郎の山嵐が決まると、投げられた相手は受け身を取れず昏倒したという表現も度々用いられるが大外刈りや大外落のような技においても同様の状況は発生しやすい。

3.2　落の発展形としての「嵐」

講道館柔道の技名の中に嵐は存在しないが、古流柔術の中には山落という名称で存在している技法がある。また、落という語で調べれば講道館柔道にも体落や谷落、隅落や浮落等が存在する。

この「落」という技法に共通するの崩した相手の重心を体ごとその地点に落とし込むものである。直接的な文献記載は存在しない以上推論の域は出ないが、この落としの技法を素早く激しく大きく行い、さらに払い足を加えることによって嵐のような苛烈な様子を技に表そうとした可能性は十分に考えられる。

4. 大東流合気柔術との関連

山嵐の形成に大東流の技法が使用されたかについて文献調査の立場から検証して見たい。しかし、「谷」「体」「浮」「隅」等に嵐をつける技はやはり存在しない。

4.1　御式内

大東流はその歴史において元々は御式内という名称で藩内上士のごく一部にのみ伝承されたと言われている。多くの文献に史料としてその記載を残すが、未だにその存在を裏付ける資料は学会レベルで提出されていない。大東流が大きく取り上げられるようになって数十年を経過するが関係者からの研究、及び活動など伝書や技術精神の口伝などは一切提出されていない。

存在しないことの決定はそのことだけを以てして出来ることではないが、平成30年の現在において武道、武術、伝統文化保存の機運の中で未だに一切の存在を裏付ける研究も証拠も提示されないという事実は確認しておくべきであろう。

4.2　同流の伝承者

大東流中興の祖として武田惣角の名はつとに知られているが、それ以前、また同時期のその他の伝承者、継承者を全く確認できない。全てが武田惣角から発している。この証拠から考えられるのは大東流は武田惣角によって創始されたと考察するのが最も妥当とする見方である。

今日、合気道創始者である植芝盛平のみならず、武田惣角の指導によって境地を開いた合気系の武道家の数は多い。しかし、やはり時代を前後して他の修行者の名前が一切知られることなく、学会レベルでの伝書の公開なども行われていない。現在の大東流の広まりから考えても、このことは非常に不自然と言える。一子相伝というわけでもなく、複数の伝承者が代々にわたって存在したのであれば、武道文化の伝承や保存の目的で、今日なんらかの形でその存在が知られて然るべきなのである。現今の大東流が多くの諸派を生み、この数十年で国際的な広がりを見せていることを考えれば、流派の姿勢が現代においても御留流としての姿勢を保っているとは考えにくく、であるならばこれまで隠れていた流派の歴史も明らかにされてくるのが自然であり、より多くの入門者の獲得につながり修行者に理解と励みをもたらすであろうことは自明の理だからである。

4.3　大東流の母体は何か

大東流合気柔術は極めて特殊な武術で武田惣角以前の伝系が不明瞭である。多くの柔術は開祖、流祖からその流派の淵源をたどることができるがそれ以前の系譜は伝説的な描写にとどまっている。

そのため、今日において合気道の源流をなす武術の一つとして多くの支持者と愛好者を輩出し続けているにもかかわらず、大東流の淵源は依然として不明なままなのである。この点については今後のさらなる研究を待たねばならない。

5. 講道館における山嵐の取り扱い

山嵐が一度は五教の技のうち、第五教の一つとして組み入れられたということは、何を意味するか。嘉納は五教の技の修練を通じて講道館柔道の技の基本から一連の応用までを、通して学べる「教程」として完成させたかったはずである。

5.1　五教の技としての山嵐

元来、五教の技という制度は、嘉納が柔道を教える上で柔道の技術を形態としての分類のみならず、学習、稽古を重ねる上で手順を踏んで行えるよう整理した指導体系と考えるべきである。

柔道の競技スポーツ化が促進するにつれて、嘉納が、そして遺志をついだとされる講道館の指導部が定めたこの教則は、形骸化しつつあるのが現状である。競技化が進み、競技人口は増えたが試合に流されず、武道を通じて真剣に人としての生き方を学び、世を補益する人材の育成に寄与する　という嘉納の標榜した柔道修行の理想からは着実に遠のいているのである。

今回、山嵐の研究を通じて五教の技を見直す機会となったことは意義深かった。嘉納は五教の技を一から順に稽古していく中で柔道の奥義に近づいて行けるよう道標を記した。

現在で言えば「指導要領」であり、すなわち第五教には講道館柔道の奥義とも言える技術の粋を一教から四教までで培ってきた基礎の上に確立して、新たな向上へ発展していくある種の到達点を示したかったのであろう。

乱取りや試合で使用が難しく西郷以外の柔道家が使いこなすことがなかったと言われる山嵐が五教の技に組み込まれ、正当な講道館柔道の指導体系の中にあった理由はなぜであろうか。

ひとえに嘉納の存念の中に西郷の発揮した技の冴えを、後進の弟子の中から継承できるものが続いてくれればという願いの現れと見るのが自然であろう。そして多くの者たちがそれを使いこなせないことが見えてきたことで、一度は五教の技から外される流れにつながっていったと考えられる。

5.2　講道館柔道　手技としての山嵐

現在、私達は講道館柔道の定める手技の一つとして山嵐に触れることができる。もともとにおいていくつか存在している複合的な要素を特殊な組み方や崩しの中で発揮するものではなく、現代の柔道の道着の作りやルールに合わせて解釈されたものが指導されているが、著者は今回の研究を通じて、この現在行われている山嵐の形は巷間で批判されるほど西郷の使用したものとかけ離れてはいないという結論に達した。

富田と横山が記した山嵐の形は現在の講道館に残る山嵐に十分に投影されている。

修行者の体質や体型、そして気質に合わせてタイミングよく全力を一点に集中させて相手を制する投げ技に昇華させていくところにこの投げ技、山嵐の必要条件がある。著者がかつて批判材料とした小谷澄之による片襟体落風の山嵐、工藤一三による片襟払い腰風の山嵐も当人達の得意技に引き込んでの解釈ではなく、各人が柔道家としての自身の有する特質を自身が十分に理解し、それを最も有効に活用できる形に昇華させることが、五教完成の形の一つとしての山嵐にあったと解釈すべきであろう。このように考えることで、往時嘉納が合理的に柔道修行を進めていく理想、嘉納の創設した柔道の歴史とのつながりをここにおいてこそ感じ取れるのかもしれない。

結　論

著者の見解は、山嵐の入り方が古流柔術に見られるような逆回転の体捌きで行われたのではないかという仮説には否定的である。理由には

- 西郷の山嵐を実際に体験し、間近で見てきた柔道家達の共通の見解は信頼に足りるものであること。
- また素早い動きの中で回転方向を見失うということは十分な経験と強さを研鑽によって構築した熟練の柔道家達が犯す間違いとしては考えにくいということ。
- 古流柔術式に投げれば受け身が取りにくいので危険な技になり、従来の伝承にある山嵐の効果に近い印象は与えるが、この方法が山嵐の本来のかけ方であるとすれば、それはより確実に他の者にも合理的に技がかけやすくなるという事であり、そうであるなら

ば、より多くの使用者があの時代において多数輩出されても不思議はない。実際はそのような現象には至らなかったのでこれが答えであるとは考えにくい。

といったことが挙げられる。

しかし、今回の考察で各人の持てる資質を全て活かして技を創出完成させる要素も重視したであろう嘉納治五郎の五教の技の制定の経過に見出せた結果でいえば、こうした一連の研究や取り組みもまた、一定の意味を持ち得るものといえよう。

今後の課題

山嵐という技は、柔道家にとって今後もロマンを含んだ重要な技であり続けることに変わりはない。現時点で遺された史料での考察は常に未完であり、節目ごとに振り返りと見直しを要する。リアルタイムで常に新たな山嵐について考察していくことが西郷の使用していた原点としての山嵐のかたちに近づく歩みにもつながっていくのである。

今回の文献調査を進捗させる中で、存外多くの流派が様々な解釈で「山嵐」「山落」を使用していたことがわかった。講道館柔道研究の本筋から外れるので本研究においてはこれらを逐一抽出することはひかえたが、興味深い発見もあったので、今後の研究においてこれらにも焦点を当てていきたい。

参考文献（著者あいうえお順）

会田　彦一 「柔道」 柏書院刊　昭和26年
磯貝　一 「柔道手引」精文館書店　昭和５年
嘉納治五郎 「柔道教本　上巻」三省堂発行　昭和６年
工藤一三 「新編　柔道教科書」北辰堂　昭和27年
小谷澄之 「柔道五教」成美堂　昭和57年
富田常次郎　雑誌「柔道」大正12年　６月号　講道館
永岡秀一・桜庭　武 「最新柔道教範」一巻～三巻　東京開成館蔵版　昭和５年
三船久蔵 「道と術」誠文堂新光社　昭和29年
山下義韶　工藤一三　新選 「日本柔道教典」帝国書院　上巻下巻　昭和６年
横山作次郎 「柔道教範」二松堂書店　大正２年